

バイカルアムル沿海州等に於ては西部の如く自然的區劃によりて之を分つこゝ困難なりトランスバイカル州にては鉛砂黒土地相交錯し蒙古のステップより漸次森林に移化し農業よりは牧畜盛にして哥薩克、ブリヤート及び鏡山會社所有地等に比して移住地少しアムル沿海地方は露西亞之經濟事情を異にし且つ距離隔絶せるも移住地多し其の北半は鉛砂の沼澤性森林、南半は樺及び針葉樹林にて移住地は黒龍江及び西比利亞鐵道に沿ひて存す黒龍江の中流に沿ひてイルチシユ河畔に於けるも同原因にて哥薩克部落あり烏蘇里河畔にては露西亞人移住地は南方に多く太平洋岸にては僅に小河流の河口に點在するのみ云々著者は其の結論に於て露人の西比利亞拓殖が已に行詰りにあるを評して曰く「廣き河床中に暴河の蜿々たるを見る然も創作力の缺乏は此の古き河床中より水流を導く能はず原始的の土地利用法は交通の不良、地域の廣漠たるに由て已に困難なる問題に到着せり今後五十年を出でずして其の既墾地は利益なきに至らん然れども西比利亞には尙廣大なる可耕地あり之を開くには東歐の原始經濟事情に慣れたる古き力に代ふるに新鮮なる力を以てせ

ざるべからず交通網の作製は特に重要なり西比利亞の經濟的發展に對してエニセイ河の重要なるこゝは特に東部西比利亞が政治上孤立する場合に於て看過する能はず近世の工學は恐らくは近く之を利用してカラ海（西比利亞の西北の海）をして各國商船の寄泊する地中海たらしむるならん」〔下出〕

彙報

●三國遺事完本の刊行

三國遺事は高麗の元宗王代即ち我が龜山天皇の文永の頃に普覺國尊一然の撰せし者にして其書五卷主として三國史記に漏れたる高麗百濟新羅の遺事を記し王氏高麗時代の事に及べり特に佛教に關する記事豊富にして海東高僧傳の如き朝鮮の古佛教史が僅か一分部のみしか傳らざる今日に於ては此の方面の研究に取りて頗る貴重なる史籍なるのみならず檀君に關する傳説を記し駕洛國記を收

め郷歌を記し其他異聞異説少からざるを以て三國史記と共に朝鮮古史研究上の要書として恰も我が古事記と萬葉集とを併せたる如き重要な地位に置かるべきものなり然るに其書は高麗末若くば李氏朝鮮の初期慶州に於て刊行せられしも中宗王正徳年間(我が後桓原天皇の御代)冊板缺失し刷本の傳存するもの稀少となりしより更に三國史記と共に慶州に於て重刊せしが三國史記は其後更に重刊の事ありしも本書には其事なかりしもの、如く慶州の邑誌なる東京雜記の府藏冊板目には本書の名あれども傳本朝鮮に於て殆ど絶え僅に金剛山の某寺にて其下半の零本の補寫多き刊本一冊を發見したるのみなりといふ日本にては幸に文祿慶長役の將來本二本傳存し一は尾張徳川公爵家に傳はり一は養安院舊藏のもの神田男爵家に傳はれり兩本共に宣徳刊本にて七葉の脱葉あり白紙を挿入するより推せば文祿慶長以前に於て既に七葉の冊板を闕迭せしものなり明治三十七年東京帝國大學は神田本に據りて本書を校刊したりしが當時は異本の比較すべきものなかりしを以て七葉の闕文を補ふに由なく且つ其の校正は周到と稱せらるれども活字に移すの頗る困難なるものを

活刷せる爲めに免れ難き刊誤ありて遺憾少なからず其後續藏經にも東京大學本を收め近年京城に於ても印刷に附せられしが研究者に向つて何等の新しき利益をも供せず東京大學本は再板の校正本の稿成りし由なるもまだ印行の事あるを聞かず然るに文學士今西龍氏近時市井に於て偶然本書の正徳刊本一部を購得せられたるにこれには徳川神田本の共に闕逸せる七葉も完備し加之此の七葉中には檀君傳説に關し杖餘に關し將又駕洛任那に關して頗る貴重なる記事を具するより今回京都帝國大學文學部に於て繼續出版の叢書の中に加へ全部をコロタイプ版に附して刊行せられたり其朝鮮古史の研究に裨益すること蓋し鮮少にあらざるべし右は大學所要の部數以外に多少の殘本ある由なれば希望者は同學部事務室に申込まるべしといふ

● 讀 史 會

例會 去る六月二十四日午後六時より學生集會場に於て開催、出席者三浦喜田兩教授、奥田江馬魚澄中村下川鈴木古田の諸學士、岩橋島田六人部中村井川勝峯末岡加藤佐

古の諸君なり先づ京都大學文學部國史研究室にて日本農業史研究中の奥田學士の講演に始まり次に喜田博士の講演あり十時過散會せり

一、尾張藩の地割制度に就て

農學士 奥 田 彥君

尾張藩に於て此制度の施行せられし村數、地割の持分及其權利の内容、地割の方法、地割の對象、地割の主體、地割施行の役名、地割費用の負擔等の項目に付て古圖書を引證して詳細に説明せられ、地割の原因に關しては(一)牧野氏損益均分説(二)小野氏共同開墾説(三)耕地整理説(四)地目變換に依る租稅負擔の公平説の内第二説を推稱し、次いで此制度の弊として土地の細分、農地交又、掠奪農業、二毛作の不能、利を以て耕地整理、共同心の涵養租稅負擔の公平を擧げ、結局此制度が徳川時代に適應せるものなる事を以て結ばれたり。

一、濱田博士の考古學上より見たる九州の古代民族を讀む

文學博士 喜 田 貞 吉君

史學雜誌所載濱田博士の論文に博士が發掘の遺物よりアイヌ日本人と同祖とするの說に賛成せるを駁し史上奈良朝以降アイヌを俘囚として内地に轉じ内地人にして奥羽の地に移れる者決して少からず斯くて二者混交し内容に於ては區別なく唯名稱上或時代迄内地の者は大和民族奥羽の者はアイヌとせられたるなれば物質的のみの研究によりて兩民族を同祖とすは早計なりと謂ふべく嚴に區別せざるべからずと論駁されたり

●支 那 學 會

例會 去る六月十日午後七時より文學部第六教室にて開催狩野内藤稔原高瀬鈴木各教授今西助教以下卒業生學生等三十七名左の講演あり午後十時散會せり

一、支那古代の奴隸に就いて

文學士 法學士 小 島 祐 馬君

奴隸は古くは奴婢として記録に現はれ其の來由は俘虜、刑餘の人、負債贖の中の前二者に由る者多く左傳僖公二十八年、史記貨殖傳に其の記事あり其の境遇は何れかの

微官に使用せられたるこゝ周禮に據りても知るべく君臣關係の如きも實は主人と奴隸との關係の發達したるものに過ぎずと解きて奴隸出身者に大官を出だせしこゝ等を述べらる

一、石遺室詩話を讀む

文學博士 鈴木 虎 雄 君

福建侯官の人陳衍字は叔伊號は石遺の名を知りしは孫雄所編の道咸同光四朝詩史に於て初まりしこゝより陳氏の略歴を紹介し彼の兄の友に葉大莊、梁蘭芬、陳寶琛あり彼亦光緒戊戌の年武昌なる張之洞の幕中に在りて沈曾植、鄭孝胥、梁蘭芬等と交り、後北京上斜街の秀野草堂址に住して天下の名士と誼を結び郷に歸臥せるこゝを前提し彼の詩論が開元元和元祐を三元として理想とせるも實は宋詩を宗とするこゝを詳細に述べられ、石遺室詩話三卷同補遺一卷の外に師友詩錄、全閩詩錄、元史記事、考工記辨證の著あるこゝを附加せられたり

● 歐 米 史 界

近けるテオドル・シーマン教授 事少しく舊聞に屬すれども獨逸史界の一耆宿 Theodor Schiemann 氏本年一月二十六日逝去せる由享年七十三なり氏は多年柏林大學の正教授として東歐史に對する造詣頗る深し殊に露西亞史に至つては世界的の權威と稱すべく近世露國の内治外交に就き精緻なる研鑽を積める點に於いて露西亞國民史家を別として他に氏と能く拮抗し得る學者を觀ざるなり其名著 *Geschichte Russlands unter Nicholas I. & II.* は氏が半生の蘊蓄を傾倒せる業績にして十九世紀前半に於ける露西亞國家の活潑なる對外發展に伴ふ國際政局の真相と歐化を完うせる國內有識階級に促進せらるる、内政改革問題の委曲を説きこの時期に對する氏の精到なる見識を示し居れりオンケン世界史叢書中に收められたる *Geschichte Russlands, Polens, und Livlands* の一篇亦氏の代表的述作の一として東歐スラヴ民族史研究者に於りては尊重すべき好著と稱すべし。氏は一八四七年七月十七日バルチツク海に面せる Karland 州に生れ Dorpat 及び Gütingen に學び一八七五年より Livland 州 Fellin に教鞭を執りしが一八八三年轉じて Eschland 州 Revel 市の古文書調査の任に

當れり一八八七年に至り遂に郷國を去つて獨逸に移り柏林大學に史學を講じて令名あり一九〇〇年正教授に任ぜられ以て今日に及び露西亞史に關するもの以外尙氏の公にせる數種の著述世に聞こえ居り就中かの近代獨逸史界に於ける俊傑と稱せらる、トライチケ氏の經歷を知らんミする人士に對し絶好の資料を供せる Heinrich v. Treitschkes Lehr und Wanderjahre. の一書最も興味を惹くものならん〔植村〕

會 報

●纂 編 餘 言

昨年以來本誌研究の栗欄に連掲して好評噴々たる天沼博士の「日本古建築研究の葉」は這般博士外遊の爲め姑く中止の已むなきに至れるを以て本號よりは牧學士の「歐米人の書ける日本史の葉」を連載すること、せり猶ほ天沼博士は歸朝後直に繼續執筆せらる、筈なり

●會 員 動 靜

入 會

京都帝國大學文學部史學科

勝峯 月溪

末岡 覺雄

同 加藤鐵三郎

同 佐古 慶三

同 左藤 義詮

同 塚本 善隆

同 藤田 信一

同 宮崎 市郎

同 退 會

同 龜岡 末吉

○寄贈交換圖書

史學雜誌 三二の七、 史 學 會

人類學雜誌 三五の二、一二 東京人類學會

歷史地理	三八の二、	日本歴史地理學會
考古學雜誌	一一の十二、	考古學會
國學院雜誌	二七の六、七、八	國學院大學
東洋哲學	二八の七、	東洋大學
經濟論叢	十三の二、三	京都帝國大學經濟學會
六條學報	一三六、一三七、	佛敎大學
佛敎大學通信講義	一の九、	佛敎大學出版部
伊豫史談	二六、	伊豫史談會
新潟縣西頸城郡史料展覽會陳列品町別目錄		
同紀念繪葉書		同會